

南西諸島の特産工芸品開発支援システムの構築

恵原 要*, 藤田純一*, 山田淳人*, 上原守峰*

Construction of a System to Support the Development of Specialty Craft Products in the Nansei Islands

Kaname EBARA, Jun'ichi FUJITA, Atsuhito YAMADA, and Morimine KANBARA

奄美を中心とする南西諸島は、特徴的な自然や文化を有しながら地域独自の特産工芸品は少なく、その特徴が活かされていない。そこで、奄美地域をモデルに、地域性を活かした特産工芸品や土産品の開発を支援するシステムを構築するため、製品の特徴づけに資するモチーフや材料、色、形などを抽出、編集し手引書の作成を試み、これを用いて製品開発を行った。また、関連機関と連携し現地の特産工芸品開発の支援を行った。

Keyword : 南西諸島, 奄美, 地域性, 特産工芸品, 支援システム

1. 緒言

本県は本土最南端に位置し、海洋に点在する島々を含む南北600kmの空間の広がりをもっている。この空間には生物地理学における分布境界線として有名な渡瀬線が横たわり、これを境に動植物のみならず、言語、習俗などの文化も大きく異なっている。また、奄美を中心とする南西諸島は、世界自然遺産登録の候補に挙がるなど、豊かな自然と多様で特徴的な文化、風土など優れた資源・素材に恵まれている。しかし、現地における特産工芸品や土産品については、食品や大島紬関連の商品を除くと地域独自の物が少なく、多くは県外産に占められ、恵まれた資源・素材が十分活かされていないのが現状である。

現地においては、地域産業の振興に繋がる工芸品の開発など地場産品興しが進められているが、地域の特徴をもった製品の開発について苦慮している。

そこで、特産工芸品や観光土産品の関連企業、団体を支援する目的で、地域の特徴ある製品開発に有効な手引書を作成して、製品開発を試みた。

また、現地においては、奄美群島広域事務組合が取り組んでいる奄美ミュージアム構想や、鹿児島県大島支庁農林課の奄美木工の里づくり事業があり、これらと連携をとりながら研究を進めた。

2. 手引書の作成

製品開発において地域性を表現するためには、何がその地域の特徴であるかを知ることが重要である。そこで、まず、「奄美らしさ」をイメージさせる要素の抽出を行った。

次に、地域の特産工芸品開発のためのプロセスを検討した。

2. 1 奄美らしさの抽出

・奄美のモチーフ

奄美らしさを感じさせるモチーフを、自然、動植物、道具や習俗などの中から約200点を抽出した。

・奄美の材料

奄美でこれまで使われてきた有用樹木とその利用法について文献等から約100点を抽出した。

また、樹木以外の工芸材料の抽出も行った。

・奄美の色

奄美のモチーフの中から、色相環上に基本色10色と周辺色をトーンの違いも含めて抽出した。

また、亜熱帯の動植物に見られる奄美らしいトロピカルな配色の抽出を行った。

これらの活用分野としては、主に、包装紙などのパッケージ、販促用・催事用ポスター、Tシャツへのプリント等のグラフィック系ツールやアイテムが考えられる。

・奄美の形

奄美をイメージする図形として、奄美のモチーフの中からシルエット化や単純化、パターン化することで図柄や文様になりうる物を抽出した。これらは、大島紬の世界では古くから行われてきたものであるが、今回は、木製品など立体的なアイテムへの展開を考慮して行った。

・奄美の言語イメージ

イメージ・スケール手法を用いて行った。

・奄美地域の特産工芸品のアイテム検討

商品展開を前提に、他産地の例を参考に抽出した。

以上、用いられた写真の事例を図1に示す。

*デザイン・工芸部

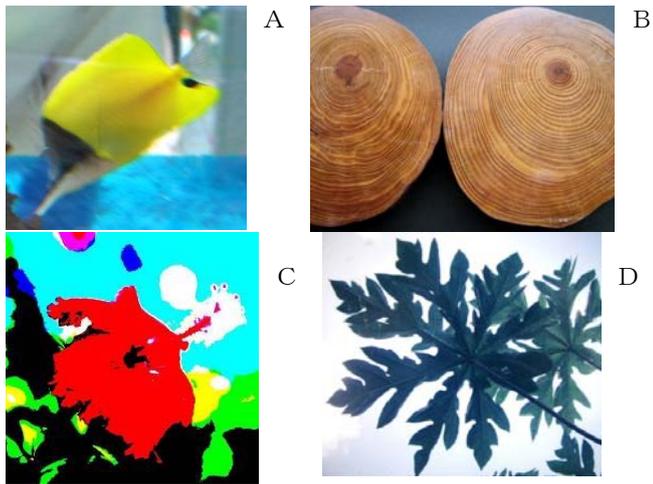


図1 奄美らしさの抽出 (A:モチーフ, B:材料, C:色, D:形)

2. 2 製品開発のプロセス

地域の特徴を表現する特産工芸品の製品開発手法について検討した。その製品開発の流れを図2に示す。

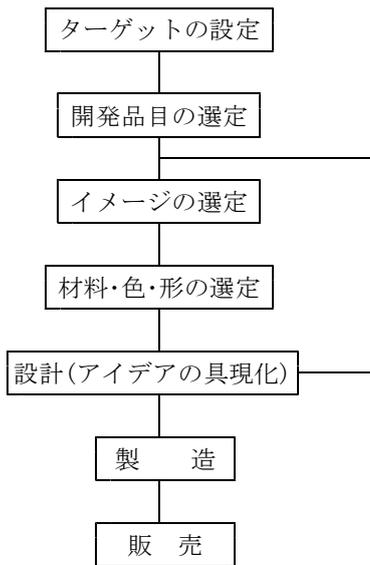


図2 製品開発の流れ (例)

3. イメージ調査

その地域が持つイメージに沿って地域らしさを表現することは、商品の販売促進の有効な手段となる。

イメージ調査の手法として、(株)日本カラーデザイン研究所の「イメージスケール手法」を用いた。

調査対象は県内の大学の職員と学生52名で、日常使われている180個の形容詞からふさわしいと思われる20個を選択してもらい、言語イメージスケール上で分析を行った。

結果は表1のとおりである。奄美に特徴的に表れた言語は、嗜好イメージでは、「トロピカルな」、「開放的な」、「まぶしい」であり、テイストパターンでは、「ナチュラル

ル」に次いで「カジュアル」のゾーンに高い値を示した。

表1 アンケートによる奄美のイメージ

嗜好イメージの上位言語		代表的テイストパターン	
自然な	76.2%	ナチュラル	31.2%
のどかな	52.4	カジュアル	15.9
のびのびとした	52.4	エレガント	14.0
トロピカルな	52.4	ダイナミック	8.1
開放的な	47.6	クラシック	8.1
まぶしい	45.2	クリア	6.5
親しみやすい	45.2	ダンディ	5.9
豊かな	45.2		
素朴な	45.2		
おおらかな	45.2		

4. 製品開発

製品開発に当たっては、商品化を前提に考え、群島内企業や関連団体との連携を図りながら進めた。対象業種としては、「奄美木工の里づくり」事業に取り組むなど関連団体の環境が整いつつある木工芸関連品を製造する企業の中から検討することとした。また、奄美群島全域をまるごと博物館に見立て、奄美の宝(群島の魅力や資源)を活かすとともに、地域潜在力を引き出し、持続可能な地域振興の取り組みを展開するという「奄美ミュージアム構想」を企画・計画している奄美群島広域事務組合との連携を図り、幾つかの提案型試作を行った。

これらは、主に、幼児、学童を対象に設定し、奄美群島を意識させるとともに知的好奇心や学習効果を高める製品として提案した。以下に、試作品としてA~Dの4例を紹介する。

A. 奄美の自然(海、太陽)を彷彿させる色をテーマとしたキーホルダーを図3に示す。本体は、奄美に自生する様々な樹種から選定した木材を使用するものとした。

B. 沖縄、奄美に伝わる独特の形をしたサバニ型の手漕ぎ漁船ミニチュアキットを図4に示す。縮尺1:25のもの、一回り小型の縮尺1:40のもの2種類を試作した。

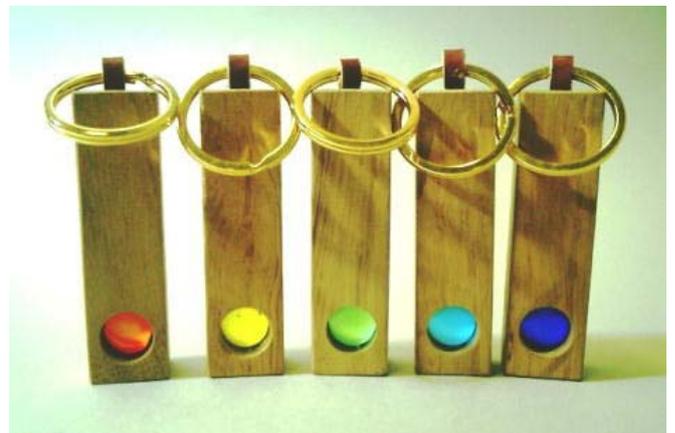


図3 奄美産木材のキーホルダー

C. 奄美群島の熱帯魚パズルを図5に示す。楽しみながら、形の違いを認識するトレーニングにつながるもので、購入者がカービング（削り）や彩色を施して仕上げる商品とした。

D. 奄美群島地図パズルを図6に示す。CDケースにパッケージングされた縮尺1:50万のものと、一回り大きな30cm角で縮尺1:20万の2種類。高い加工精度が必要なため、炭酸ガスレーザ加工機により作成した。

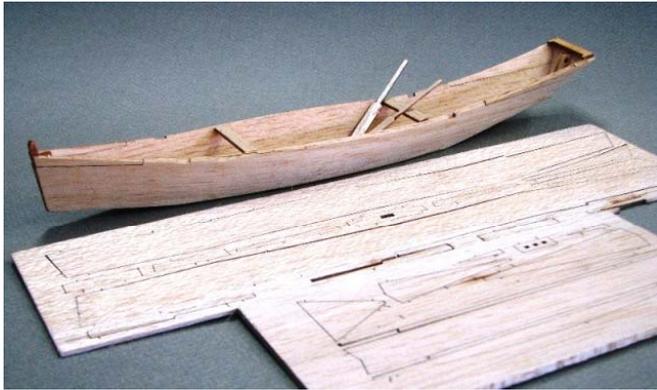


図4 伝統木造船のミニチュアキット

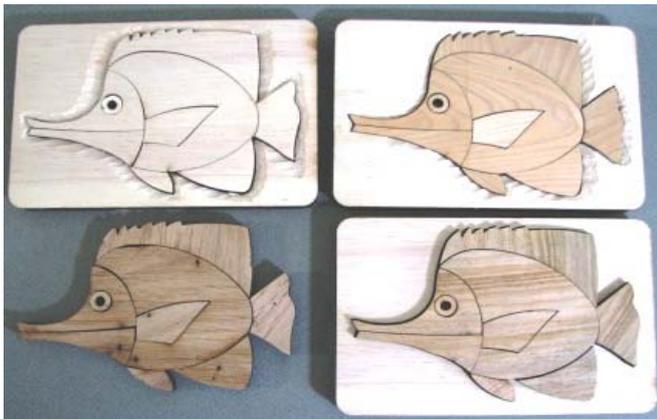


図5 奄美群島の熱帯魚パズル

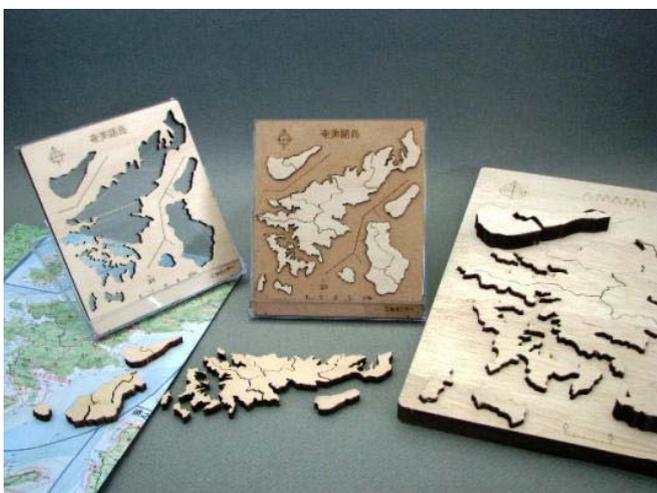


図6 奄美群島地図パズル

5. 関連機関との連携

5.1 技術支援

平成16年度に始まった鹿児島県大島支庁農林課の事業である「奄美木工の里づくり」と連携をとり、関連企業や団体を本研究事業の主な技術移転先と捉え、奄美産木材を用いた製品開発のための支援を継続的に行った。

5.2 デザインコンペティション

かごしまデザインフェア・デザインコンペティションは、県内企業から課題を募り、全国に募集をかけ、入選作品の商品化を目指してきた。今回、奄美木工の里推進協議会では、本研究と連携をとりながら特産工芸品開発支援の一環として2005年のデザインコンペの課題に「奄美産木材を利用した木製品のデザイン」で応募したところ、採択された。そこで、このテーマで作品募集を行ったところ、学生、デザイナー、木工家から島内の木工関係者まで、広い範囲から31点の応募があった。入選12点の中で優秀賞に選ばれたリュウキュウマツを用いたローテーブルを図7に示す。この作品は、島内で試作された後、商品化に至った。また、島内木工関係者も出品に向けて製品開発のトレーニングをするなど、デザインコンペティションとの相乗効果は大きいものであった。



図7 リュウキュウマツを用いたローテーブル

6. 結 言

奄美のような特徴ある自然や文化を有する地域において、製品やパッケージにその地域性を表現することは、特徴ある製品の開発に有効である。しかし、奄美を特徴づける素材の収集には、量的に限界があるため、web上の関連サイトのリンクを張ることで利便性を図ることとした。しかし利用には制約があるため、利用者は独自に素材を追加するなど、環境を自身で整備することを前提に作成した。作成した手引書は、一つのひな形とも言うべき物として提案するものである。

